様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６９９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３９１

研究課題名（和文）ニュー・ドラマトゥルギー―現代アメリカ演劇の再歴史化を試みる

研究課題名（英文）New Dramaturgy: Attempting to Re-historicize Contemporary Ameritcan Theatre

研究代表者
内野　儀（UCHINO, Tadashi）

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：４０１６８７１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「ニュー・ドラマトゥルギー」という新しい方法的概念を通じて、アメリカ合衆国発のパフォーマンス研究と大陸ヨーロッパ発の演劇学／演劇研究という相互排除的な学問分野を横断することの学術的意義を問うものだった。いわゆるコロナ禍という歴史的な事態を受け、演劇研究を根本的に考え直す必要が生じた。本研究の目的を放棄したわけではなく、より多方面から課題が押しよせてきたのである。そのため、日本語圏の現代演劇の原理的問題について、なかでも、演劇の「公共性」についても理論的に考えなければならず、本研究で得られた新しい「ドラマトゥルギー」をめぐる知見を生かした学術的・一般的論考を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、当初掲げた研究目的からの必然的な展開として、コロナ禍以降の社会情勢の歴史的な変化を受け、現代日本演劇における公共性の問題を研究するという場面へとつながっていった。日本国内の各地で公共劇場が稼働してある一定の時間がたつ現在、演劇の作り方とかかわるドラマトゥルギー（演劇の構造を幅広く示すための語）の新しい段階（「ニュー・ドラマトゥルギー」と専門用語では呼ばれる）の諸課題を考えつつも、現代演劇がかかえる原理的問題を日本語圏演劇を事例する研究成果として発表できたので、それ相応の社会的な意義があったと自負している。

研究成果の概要（英文）：This study questioned the academic significance of crossing the mutually exclusive disciplines of performance studies originating in the United States and theater studies/theatre research originating in continental Europe through the new methodological concept of "New Dramaturgy. In the wake of the various social changes caused by the pandemic, it became necessary to take time to fundamentally rethink how we study theater. This does not mean that the purpose of this research has been abandoned, but rather that issues have been pushed aside from other aspects. Therefore, we had to think theoretically about the "public nature" of theater with regard to the fundamental issues of contemporary theater cultures in Japan, and for this purpose, I made significant use of the findings of this study, regarding New Dramatury, both academic and journalistic outputs.

研究分野：表象文化論

キーワード：現代アメリカ演劇　ヨーロッパ演劇　パフォーマンス研究　演劇研究　ニュー・ドラマトゥルギー　パフォーマンス文化の織り合い　演劇史　演劇理論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
アメリカ初のパフォーマンス研究とヨーロッパ発の演劇研究のあいだにある乖離が、研究者自身に必ずしも自覚されないままの現状があった。そのとき、演劇の制作方法として「ニュードラマトゥルギー論」が盛んに論じられるようになり、この理論的でもあり、かつ実践的でもある「論」が、脚光を浴びることになってきていた。職能としてのドラマトゥルグについての研究もそのうちに含まれるが、いわゆる divising とも呼ばれる、従来の制作現場のヒエラルキーを脱する方向の集団制作においても、ニュー・ドラマトゥルギー論は生かされる可能性が出てきたいた。それはまた、ドラマトゥルグとう職能が必ずしも一般的ではなかった日本語圏や東南アジアの現代演劇実践について、理論的インプットをもたらすだけでなく、実践的な原理を提供する可能性も指摘されるようになっていた。

２．研究の目的
本研究は、「ニュー・ドラマトゥルギー」という新しい方法的概念を通じて、アメリカ合衆国発のパフォーマンス研究と大陸ヨーロッパ発の演劇学／演劇研究という相互排除的な学問分野を横断することの学術的意義を問う。より具体的には、１９６０年代以降の現代アメリカ演劇の再歴史化という研究プロジェクトとして本研究を定義し、これまでにない画期的な現代アメリカ演劇史を構築することを目的とする。

３．研究の方法
（１）　研究の第一段階として、英語圏と大陸ヨーロッパについて、演劇研究の歴史が、主としてルネッサンス以降、近代を経過するなかで、どのように展開してきたかを、比較対照しつつ、大まかに把捉する作業を継続する。（２）（１）と並行して、パフォーマンス研究及び大陸ヨーロッパ的演劇学／演劇研究がこれまで残してきた学術的業績を振り返る作業を行うが、漠然と作業するのではなく、その理論的展開とその達成を現在的に把握することと、これまで現代演劇について行われてきた研究成果を把握するという二つのテーマを持って、資料収集を行う。（３）「ニュー・ドラマトゥルギー」という近年脚光を浴びている方法的概念について、関連する資料収集・研究分析を行うだけでなく、そうした研究が登場してきた歴史的、社会的、文化的文脈をふまえたうえて、英語圏と大陸ヨーロッパ圏における演劇研究をめぐる同時代の批評言説を比較検討するための、資料収集も同時並行的に行う。（４）　（１）～（３）までの研究にある程度目途がたった段階（平成３２年度を想定している）で、著作の出版を視野に入れた学会発表・論文執筆に取りかかる。具体的には、１９６０年代以降の現代アメリカ演劇について、パフォーマンス／上演がテクストよりも「前景化」している演劇実践と、伝統的な劇作家とその上演について、「ニュー・ドラマトゥルギー」という方法的概念を媒介させることで、いかにすれば有機的な関係性をもった歴史記述が可能であるかが、その「学術的問い」の核心となる。対象となる集団や作家は、６０年代のリヴィング・シアター、オープン・シアター、パフォーマンス・グループ、７０年代に登場するロバート・ウィルソンやリチャード・フォアマンらの「イメージの演劇」、８０年代以降のウースター・グループ、ジョン・ジェスラン、レザ・アブドー等に加えて、今世紀に入って高い評価を得ているビルダーズ・アソシエーション、エレベーター・リペア・サービス、ネイチャー・シアター・オヴ・オクラホマ、他方では、サム・シェパート、デイヴィッド・マメット、トニー・クシュナー、スーザン＝ロリ・パークス、リチャード・マックスウェルといった現代を代表する劇作家である。（５）より具体的には、（４）に関連した資料購入を継続的に行うが、文字資料に加えて、映像資料（含 DVD）も収集する。また、現代アメリカ演劇についての資料が集積されているニューヨーク公立図書館舞台芸術分館における資料収集を隔年で行う。（６）こうした研究の結果を、学会発表と論文執筆へと具体化したのち、本研究が終了する年度の前後までに、新たな視点から書かれた現代アメリカ演劇史として出版する準備が整っていることを目指す。そのため、当該研究者が招聘研究員をつとめたベルリン自由大学国際演劇研究センターにおける研究評価を兼ねた研究打ち合わせを隔年で行う。

４．研究成果
　本研究は、「ニュー・ドラマトゥルギー」という新しい方法的概念を通じて、アメリカ合衆国発のパフォーマンス研究と大陸ヨーロッパ発の演劇学／演劇研究という相互排除的な学問分野を横断することの学術的意義を問うものであった。より具体的には、１９６０年代以降の現代アメリカ演劇の再歴史化という研究プロジェクトとして本研究を定義し、これまでにない画期的な現代アメリカ演劇史を構築することを目的としていた。
　しかしながら、研究期間中におきたいわゆるコロナ禍によって、地理的な移動が大幅に制限されたための研究交流が停滞したのみならず、この歴史的な事態に当たって、演劇研究を根本的に考え直す時間が必要なのではないか、と強く感じることにもなった。本研究の目的達成を断念したのではなく、文字資料中心の資料収集等は順調に進む結果とはなった。ただし、当該研究の目的を果たすための学術的下準備、ないしは成果を論文として発表する前に、考えておかねばなら

ないことが多方面から押しよせてきたといった感触である。そのため、本研究の実施期間中、特に後半は、日本語圏の現代演劇の原理的問題についての論考を発表する機会が増える結果となった。演劇のドラマトゥルギーについて思考しつつも、演劇の「公共性」、劇場、あるいは演劇の制作方法それ自体についても、理論的かつ実践的に考えなければならず、そのためには、地理的問題もあり、日本語圏演劇研究に、本研究で得られた知見を生かすことになったのである。

その成果としては、以下に書誌をあげるが、商業誌ながら、演劇専門誌としての長い出版の歴史をほこる『悲劇喜劇』（早川書房、隔月刊）に、6 回にわたって連載した論考がある。タイトルを、「メディアとしての現代演劇―生活と世界を別の回路でつなぐ」として、日本の現代演劇を中心的な事例として、演劇の社会的なありようを、原理的に問いかつ説明するような連載原稿を発表した。

1,　　メディアとしての現代演劇―生活と世界を別の回路でつなぐ　第一回「演劇と劇場の公共圏―公共劇場とは何か」、2022、「悲劇喜劇」75 巻 4 号、早川書房、48～53 頁。
2,　　メディアとしての現代演劇―生活と世界を別の回路でつなぐ　第二回「オルタナティヴな公共圏―現代において、演劇がメディアとして正しく機能するには？」、2022、「悲劇喜劇」75 巻 5 号、早川書房、66～71 頁。
3,　　メディアとしての現代演劇―生活と世界を別の回路でつなぐ　第三回「コレクティヴ―劇団制とプロデュース制のあいだ、あるいはその「外」」、2022、「悲劇喜劇」75 巻 6 号、早川書房、64-69 頁。
4,　　メディアとしての現代演劇―生活と世界を別の回路でつなぐ　第四回「国際共同制作、インターカルチュラリズム、アーティスト・イン・レジデンス」、2022、「悲劇喜劇」76 巻 1 号、早川書房、96-101 頁。
5,　　メディアとしての現代演劇―生活と世界を別の回路でつなぐ　第五回「オルタナティヴなスペースは可能か？―公共と民間の狭間で」、2023、「悲劇喜劇」76 巻 2 号、早川書房、94-99 頁。
6,　　メディアとしての現代演劇―生活と世界を別の回路でつなぐ　最終回「オルタナティヴなシーンをプロデュースする―プラットフォームの思想」、2023、「悲劇喜劇」76 巻 3 号、早川書房、78-83 頁。

これら一連の論考は、近い将来、単行本ないしは新書として一般社会に問う内容を目指しているが、本研究におけるニュー・ドラマトゥルギーという概念に寄りそうかたちで、まずは、演劇の「公共性」という近年、以前以上に脚光を浴びつつある主題をまずは論じることになった（書誌 1）。西洋演劇における理念としての「公共性」と現代日本におけるいわゆる公共劇場の「公共」との関係を再考する文章である。

書誌 2 では、オルタナティヴという語をキーワードに、ニュー・ドラマトゥルギーの「ニュー」に呼応するような新しい演劇の作り方をめぐる研究成果を文章化した。その際、重要になるのはコレクティヴという具体的な創作母体である。これまでの劇団やプロデュース制ではなく、ゆるやかな集まりとしてのコレクティヴについて、書誌 2 から 3 の連載記事で論じることになった。現代美術の動きに対応するように、現代演劇においても、ヒエラルキーを廃してよりフラットな横のつながりをコアとして演劇を創造するアーティストが増えてきたのである。

さらに、コレクティヴとは全く異なる制作方法である、国際共同制作について、書誌 4 で取り上げた。ここはポスト植民地主義批評が明らかにした文化簒奪の事例とされた元宗主国による旧植民地文化を積極的に取り入れることで毀誉褒貶があったインターカルチュラリズムについて、その同時代的な動向までを視野に収めつつ、アーティスト・イン・レジデンスという制度の日本における事例を紹介し、国際共同制作の可能性を論じた。

書誌 5 では、日本語圏を事例にしつつ、今度は演劇が上演される場について、オルタナティヴをキーワードに事例研究を行った。半官半民の京都のシアターＥ9 から、2 名の個人が共同運営する東京・三鷹にあるＳＣＯＯＬというスペースまで、その可能性について論じることになった。

書誌 6 の連載最終回の文章では、近年、演劇が立ち上がる場であるだけでなく、ネットワークの起点となるようなプラットフォームという考え方について取り上げた。中でも、日本におけるプラットフォームの機能をはじめて発揮したフェスティバル／トーキョーとＴＰＡＭ（現・ＹＰＡＭ）という全く性格の異なるプラットフォームを取り上げて論じた。

本研究の研究目的のうち、ここまでがその発展系として活字化したものである。作品そのものではなく、作品がたちあがる場や環境についての議論を原理的にした結果である。もちろん、場や環境は、時間芸術としての演劇作品がどのようなプロセスで生成するかというニュー・ドラマトゥルギー論と密接な関係にある。今後は、移動制限がほぼなくなった現在。アメリカ演劇の実地調査を含め、本来の目的であるアメリカ演劇史の再訪というプロジェクトを具体的な研究成果として発表していきたい。

その他、本研究にとって重要なのは海外との学術交流であった。コロナ禍によって、海外での発表は限られたが、本研究開始直後の 2019 年、アジア・ドラマトゥルグ・ネットワーク会議で、基調講演を行う機会を得、実践家や研究者との交流の機会がもてたことは、本給に弾みをつけるはずであった。研究交流は中断しているが、これから徐々に再開していきたい。（Theatre as Assembly: “Theatre as Assembly”: Radical Dramaturgy in “Theatre Commons,” keynote,

Asian Dramaturgs' Network Conference 2019: Dramaturgy and Human Condition, 2019. 5.25-26,Festival House, Singapore)。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 内野儀	４．巻 25
２．論文標題 リー・ブルーアのために―しなやかな前衛精神ということ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 舞台芸術	６．最初と最後の頁 139－150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Uchino, Tadashi	４．巻 n/a
２．論文標題 Letter from Japan: How artists experimented with complex online theatre formats during the last one and a half years　Emerging with a Vision	５．発行年 2021年
３．雑誌名 nacht critic.de	６．最初と最後の頁 n.p.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 内野儀	４．巻 n/a
２．論文標題 もしもし？！	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Kyoto Experiment 2021 Autumn マガジン	６．最初と最後の頁 48－49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 内野儀	４．巻 なし
２．論文標題 「観客に向かって語られるわけではない演劇」とは何か？―『消しゴム山』をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 チェルフィッチュ×金氏徹平『消しゴム石』	６．最初と最後の頁 76-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 5
2．論文標題 脱領土化／再領土化から〈破片〉的へ ―あるいは、10年代の上演系芸術を俯瞰する(4)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ASSEMBLY	6．最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 6
2．論文標題 脱領土化／再領土化から〈破片〉的へ ―あるいは、10年代の上演系芸術を俯瞰する(5)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ASSEMBLY	6．最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 7
2．論文標題 脱領土化／再領土化から〈破片〉的へ ―あるいは、10年代の上演系芸術を俯瞰する(6)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ASSEMBLY	6．最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 2121
2．論文標題 統覚の複数性―ダムタイプの方へ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国際演劇年鑑2021	6．最初と最後の頁 232-241
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 -
2．論文標題 「インターカルチュラリズム」と「国際共同制作」―『プラータナー』を正しく歴史的に理解するために」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 岡田利規他編著『憑依のバンコク、オレンジブック』	6．最初と最後の頁 113-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 UCHINO, Tadashi	4．巻 Special Issue
2．論文標題 From Noh to Shogekijo	5．発行年 2019年
3．雑誌名 American Theater	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 116:6
2．論文標題 観葉植物はセックスをするか―岡田利規『NO SEX』をミュンヘンで観る	5．発行年 2019年
3．雑誌名 新潮	6．最初と最後の頁 228-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 -
2．論文標題 イベント主義から遠く離れて―「響きあうアジア2019」のいくつかの企画について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際交流基金アジアセンター「アジアハンドレッズ」	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 4
2．論文標題 脱領土化／再領土化から〈破片〉的へ ―あるいは、10年代の上演系芸術を俯瞰する（3）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ASSEMBLY	6．最初と最後の頁 48-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 2020
2．論文標題 岡田利規の時代―2010年代の舞台芸術	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国際演劇年間	6．最初と最後の頁 238-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 23
2．論文標題 豊島重之のために―絶対演劇とその時代	5．発行年 2020年
3．雑誌名 舞台芸術	6．最初と最後の頁 91-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 N/A
2．論文標題 ヨーロッパ・フェスティヴァル文化から岡田利規／チェルフィッチュが受けた歓待を理論化／歴史化する―「横断＝貫網の詩学」と「委任されたパフォーマンス」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 「チェルフィッチュ創立20周年記念サイト」	6．最初と最後の頁 NP
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 N/A
2．論文標題 集会(アセンブリ)としての演劇／劇場―シアターコモンズ’18のために	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『シアターコモンズ’18 Report Book』	6．最初と最後の頁 44-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内野儀	4．巻 61.11
2．論文標題 〈詩〉は到来するか？―ドラマとフォーマリズムの現在	5．発行年 2018年
3．雑誌名 現代詩手帖	6．最初と最後の頁 10-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　4件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 内野儀
2．発表標題 日本の現代演劇
3．学会等名 文化教育研究プロジェクト連続セミナー「多文化共生としての舞台芸術第8回（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 UCHINO, Tadashi
2．発表標題 Theatre as Assembly: Radical Dramaturgy in “Theatre Commons”
3．学会等名 Asian Dramaturgs' Network Conference 2019（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 内野儀
２．発表標題 Sam Shepardの「晩年のスタイル」を検討する」
３．学会等名 日本アメリカ文学会第58回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 UCHINO, Tadashi
２．発表標題 heatre as Assembly: Radical Dramaturgy in “Theatre Commons” (updated)
３．学会等名 Contemporary Japanese Theatre Workshop, German Institute for Japanese Studies Tokyo（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 UCHINO, Tadashi
２．発表標題 Theatre of the Tourist in the Age of Mobility: Kamisato Yudai and Choy Ka Fai (revised)
３．学会等名 第20回台北芸術祭（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Peter Eckersall, Barbara Gailhorn, Andreas Regeisberger and Cody Poulto	４．発行年 2021年
２．出版社 Llandysl, Wales: Gomer Press	５．総ページ数 269
３．書名 Okada Toshiki & Japanese Theatre	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関